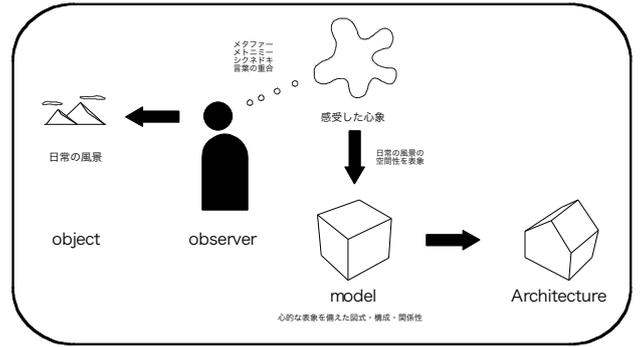


0.序



ぼくたちの身の周りには、それが建築の形を成していなくとも、自然や慣習的な日常の中に空間性と呼べるような原石に触れてはいるが、その多くは気付かなかったり見落されたりして生活の中に埋没してしまっている。しかしそれに気がついたり、何かを見出したりすることで、日常が日常のように感じないような不思議な感覚に陥ったりする。そういった空間自体が人の意識やちょっとしたきっかけで変化する様を既にぼくたちは身近な日常の中に体感している。日常の中から空間認識の解釈を広げると感じた事象を拾う。それを建築になる以前の空間性を備えたもの、空間図像として制作する。事象、図像、建築を通し空間認識の新たな在り方を探る。

1.設計手法

収集した日常の事象から空間性の抽出を行い言語化する。その言葉を重合させたり、事象のイメージの読み換えにより空間性を伴った図像を生成する。

日常の中の事象

日常の中で空間性を感じた事象の抽出



ハード形が並ぶポストカード 空海/オランダ オペラハウスの天井/オーストラリア リンダリー/オーストラリア 白紙染付/マダガスカル 軒窓の山 聖柱/岐阜 板の配置/群馬 水田/岐阜



遠く景/群馬 大赤坂/本郷 山と雲/富山 テンペリシティ 芝/横浜 雲/群馬



ルビンの壺 ユーリウスの彫像/マダガスカル 壺/マダガスカル リンダリー



タイルの隙間 アイスクリーム



空と海/オーストラリア 壁の白 カフェ/オーストラリア 日本家庭/岐阜



森



山と海の間/オーストラリア 石橋/オーストラリア ホテルの廊下 浜所ドア/群馬



スコープお菓店 通作/デュシャン 裏側へのドア/群馬 庭への抜け/群馬

事象に潜む空間性

空間の質を主観的視点で抽出

類似性 反復性 均質性 規則性 視覚の錯乱

蠢く者たち 奥行きのかなさ 不可視の可視化
変化の過程 ムラ 微かな動き

どちらか片方 同じ本質 密かな妄想
ゆらぎ 閉じこめられた世界

スケールの拡大 意識の浮遊
リアリティの拡張

存在しない境界 出会い 光と闇

森の状態

突然の出会い 異なる時間
裏切りへの期待 異なるものの共存

マイクロとマクロ 覗き穴の神秘性
別世界への入り口

空間図像

抽出した空間性の図像化

『moriのカタチ』

『均質の中のブレ』

『next door』

『utsuwa』

『スケールの喪失』

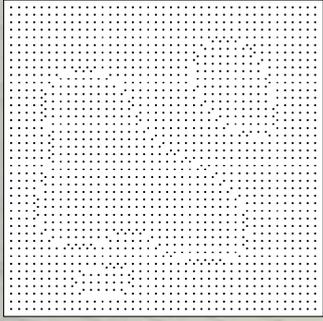
2.空間図像

抽出した空間性から生成したモデルは空間の構成の水準だけではなく、人が事象と対峙したときに抱く感覚や質感を伴い、経験する人それぞれに固有の心象を描くことを可能にする。



3. 画像から設計への展開
 生成した画像をもとに具体的な機能を付与し設計を行う。住宅においては、抽出された空間性をフォルムや構成の水準ではなく住人の生活の中で知覚できる空間であるかに重きを置く。
 この展開の過程で、モデルでは抽象的であった心象風景をより具体的な機能・用途の元、検証する。

『均質の中のブレ』
 日常の事象から空間画像へ



見渡す限りに並ぶ柱。グリッド上に立てられた柱の中に部分的に作られたムラ。その領域だけは半グリッド分ずれている。模型を俯瞰したり真横から眺める視点ではなく画像の中に埋没していく視点。そしてやがてその境界面を発見する。
 均質なものの裏側に隠されたもう一つの世界の豊かさ。

空間画像「moriのかたち」から展開された住宅の提案。

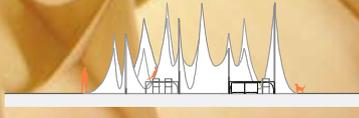
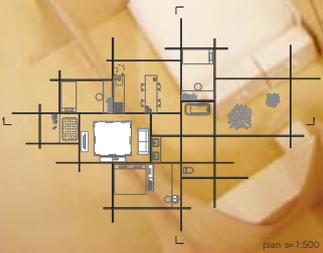
内部は扉のような明確な境界は存在せず、カテナリー型に切り取られた壁面が連続する。

明確な境界面はないが壁面下部には立ち上がりが設けられており、それぞれの室へ移動するときに「跨ぐ」という行為を伴う。

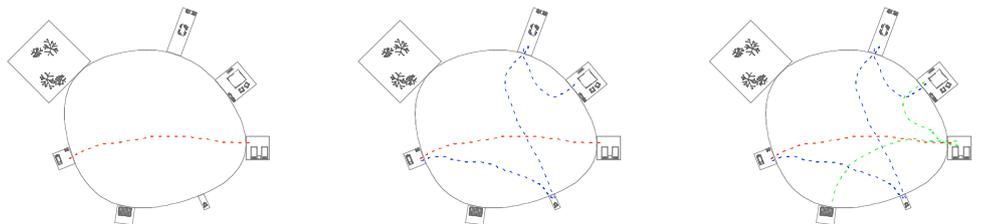
隣接する部屋においては視線が対面する関係であるが、離れた部屋にとっては音や気配は感じつつも、同じ質のようで異なる質を持つ場所のように認識できるのではないが。

本質が同じでありながら隣り合う世界の異なる境界面。

Forest House
 空間画像から設計への展開



スケールの喪失
 日常の事象から空間画像へ



日常生活の中で、日常と非日常の空間を行き来する。この繰り返される、スケールの断絶と記号的意味の消失が人の意識と身体を「喪失」へと誘う。

自分の居場所とその向こうの場所。
 すべては何もないが想像を膨らませることはできる。
 その先への可能性。
 扉の向こう側。
 予期しない状況に出会うの空間。
 異なるふたつの空間の行き来。
 扉の持つ記号性、閉ざされている、向こう側に空間がある（と想像できる）

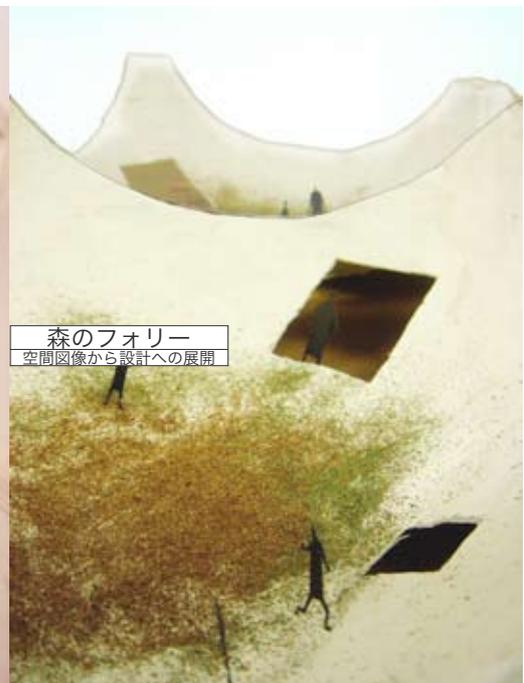




moriのカタチ
日常の事象から空間図像へ



next door...
日常の事象から空間図像へ



森のフォリー
空間図像から設計への展開

4. 図像から設計への展開
設計への展開を住宅から規模を大きくし複数の人が使用する状況において展開し検証を行う。

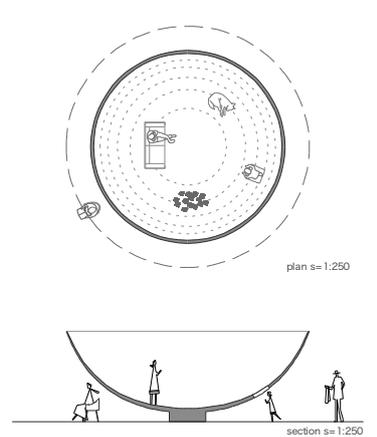
4-1. 図像の選択とその空間性

食卓の上に並べられた食器にはいろんな隙間が生まれてくる。緩いカーブを描いた平らな皿や大きく窪んだ深い碗。それらがテーブルとの間によって生まれる切り取られた形。

お皿とテーブルとその隙間。

それぞれが空間として立ち上がる。切り取るこちら側と切り取られたあちら側。

その形状は球体面の内側の空間と外側の空間を作り出す。明確な境界面がありつつもこのふたつの空間がある瞬間に等価な関係になる、そんな関係性を持つ空間を、食卓の上に並んだテーブルから感じた。その体験が自分の身体を通して実感が得られるような建築として保育園を選択する。時に境界を無視し、ありのまま走り回る子どもたちにとって、空間とは何か、感じることは何かを問いたい。



4-2. 建築概要

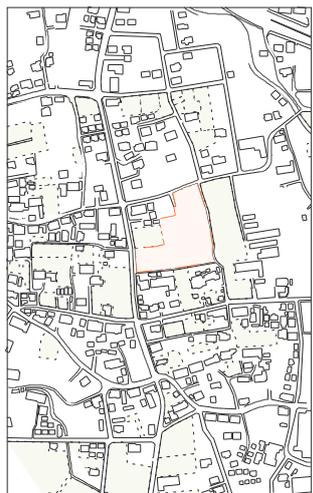


まだプリミティブな空間を子どもがどんなふう体験するのだろうか。
子どもの空間体験、五感に訴えかける。

光や音や匂いといった周囲の環境が様々に入り込んでくる。
環境が建築の内側をそのまま通り抜け、それらが同時に建築の空間をかたちづくる。
建築と自然環境とが滑らかに解け合いながら空間が現れてくる。

まちや周囲の建築だけでなく、テーブル上のコップや草花や小鳥や雲もすべてが同じひとつの世界にあって、つながっている瞬間を感じとれる。
すべての断片的なシーンが等価で、並列で、隣でさっきまで遊んでいた子の玩具や、年上のお兄ちゃんたちが使っていたボールまでもその空間にとけ込む。
みんなそれぞれの時間を生きているが、ある瞬間、自分の意識と繋がって、みんなひとつの世界にいることを感じとれる。
そんなおおらかさを持った子どもたちのための空間として、この保育園を提案します。

4-3. 計画地概要



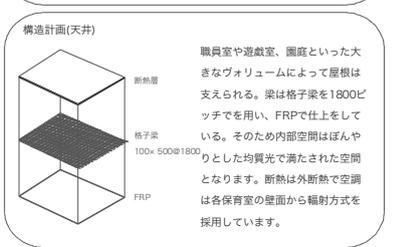
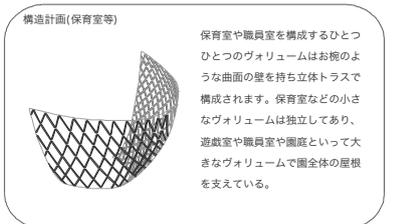
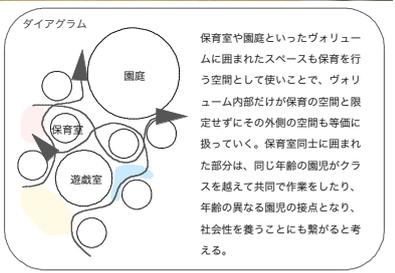
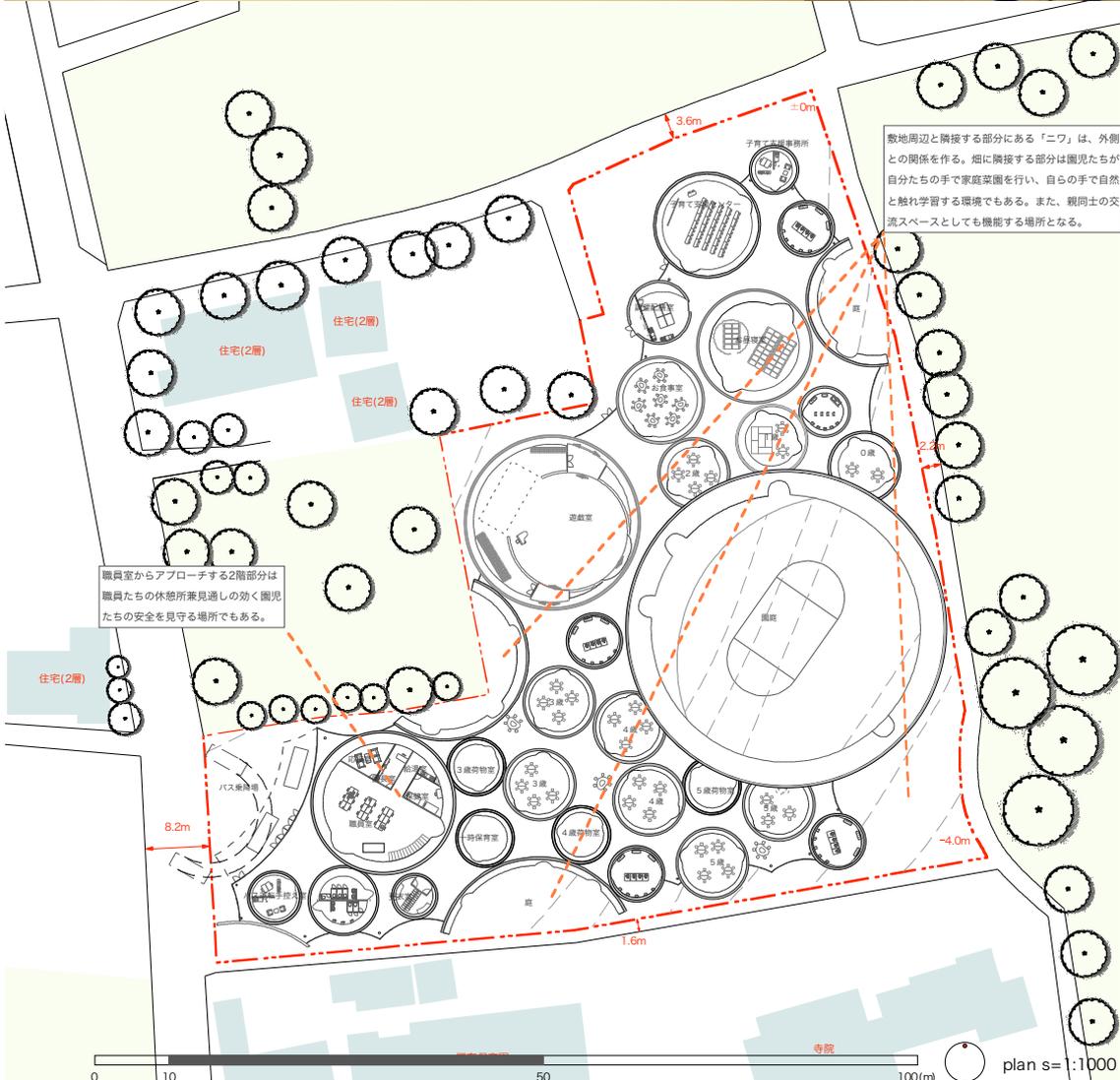
本計画地は群馬県渋川市にあり、敷地周辺は畑が多く、その中に住宅など小規模の建物が比較的低密度である。現状は本計画地の向かいに既存の保育園が建っているが園舎の老朽化に加え、敷地周辺の地域の発展に伴う園児数の増加に対応するため園では、新築を検討している。計画地周辺の住宅等の密度とスケールはこの土地に良好な環境を形成していると考えられる。その風景を壊すことなく、また積極的に周辺と関係を取り持っていけるような建築のあり方を検討する。



4-4. 空間構成



円形の平面を子どもたちが動き回る。等価に扱われたヴォリュームの内部と外部だが、この球面の壁は明確に2つの異なる世界に分節をしている。けれど、動き回る子どもたちにとってはどちらも「囲われた空間」と感じるだろう。その中でも明るかったり、暗かったり、広かったり狭かったりといった、日常に潜む小さな空間の差異を発見してることが可能なのではないだろうか。



- 建築概要
- ・平屋建て
 - ・敷地面積6820㎡
 - ・延べ床面積1,500㎡程度
 - ・園舎面積1120㎡
 - ・運動場面積1040㎡
 - ・建築率：60% 4080㎡
 - ・容積率：200%
 - 用途地域：第2種住居地域
 - 道路幅員：東側：1.6m 西側：8.2m 南側：2.2m 北側：3.6m
- 所要室および定員
- ・定員 170人
 - 0歳児保育室 (定員10人×1室)、1歳児保育室 (定員15人×1室)
 - 2歳児保育室 (定員25人×1室)、3歳児保育室 (定員25人×2室)
 - 4歳児保育室 (定員25人×2室)、5歳児保育室 (定員25人×2室)
 - 厨房、一時保育室 (1室)、子育て支援センター (別棟・1室120㎡)
 - 遊戯室 (1室350㎡：ステージ・収納小机・椅子類>庫込み)
 - 事務室兼医務室、調乳室・浴室、職員更衣室
 - その他 (玄関、テラス、トイレ、教材庫、物置)